

連絡二三一ノス

日本海

日本海のイワシ資源

山中一郎

(58)

日本海の大羽イワシの漁獲高を左右させる要因の一つとして、対馬暖流の沿岸状況と沿岸渦流の発生による好漁場生成場所の変化という海洋学的要因のあることは既に知られており、これを用いての局地的漁況予報はある程度成功している。しかし乍ら、これと同時に是非考えなくてはならぬのは、来遊資源量と漁獲の圧力を考えたところの所謂資源学的研究と漁況予報である。元来資源研究は、海中の漁群体に及ぼす人為的効果（漁獲其他）と他の要因と分離し、一面において漁獲努力の増加と漁況の認められたことは喜ばしい限りである。研究の方針は多少数理的になるべく省略するが、日本海の大羽イワシについては現在の流網で漁獲されるものについては、海中の資源量のうち、漁場に来漁するものは二割乃至六割であり、更にその三分の一乃至半

より、氣をつけなくてはならないことは、

第59号

新潟市万代島
日本海区水産研究所

印刷
株式会社早川商店
昭和30年12月1日発行

分類漁獲されている、大

羽イワシに関する限り、大

この程度の漁獲によつて

資源が危険に落入ること

は考へられないのである

が、この来遊率は海況によつて

漁獲の行なわれていることは、前述

のとおりであるが、これは海況と来遊率との関係を利用したに外ならない。ここ数年来の年令組成と漁獲統計を活用した数理的研究により、このように来遊率の数量や資源量に関する数値が出るようになりつゝあることは、漁獲予報の方法改善と精度向上の上に将来大に役立つものと考えられてよいであろう。

大羽イワシの資源の動態が漸く明になりかかるにつれ、当才異の問題の重要性が浮び上

つて来る。当才異イワシについては、体長年令等の組成や漁獲統計は大羽イフシほど明にされていないが、それでも同様な推算を行つて見ると、漁場に来遊するものは二割五分乃至三割五分で、漁獲されるものは海中資源量の約二割乃至二割五分となり、来遊するものに対し漁獲されるものが非常に多い。将来

主なる項目・第五十九号	
日本海のイワシ資源	山中一郎
日本海西部漁業技術委員会第2回会議	
沿岸資源・底質漁業資源担当者会議	
浅海増殖協議会	
内橋潔	
山形県水産試験場創立三十周年記念式	
兵庫県に於ける第四回漁村青年大会	
香住支所研究談話会	
日本海沿岸における青年活動の状況	

漁獲の圧力が大であるということと、資源の枯渇ということとは別に考へなければならぬことである。なるほど漁獲の圧力が高ければ、生き残る親魚は減じて、親魚の漁獲は減ることは明であろうが、そのため異が根たやすくになるとは限らない。僅かの親魚しか残らなければ、再生产力が十分で、次代の資源には影響のない例は多く、イワシについてはこの点まではまだわからぬ。

しかし、いづれにせよ、イワシ資源を考えるときには、漁獲の影響は先づ第一に考へなくてはならぬ要因であることは間違ひないであろう。

第一回日本海西部漁業技術改良普及会議開催される

水産庁主催の漁業技術改良普及事業日本海西部プロック会議は十一月二日、三日の二日間山口県外海水試験場で、研究第二課長各県水試担当者、漁業者約三十名が参考して開催された。

第一日は研究第二課長、山口県水産部長の挨拶ならびに本事業の意義についての説明があり、ついで各県より過去三年間にわたって実施した事業の報告が行われた。これについては各県担当者ならびに漁業者の間に活発な意見の交換がなされた。その概要是、山口県外海水試の出された「第一回日本海西部漁業技術改良普及会議要録」を参考されたい。

(1) 第二日は本事業に関する水産庁各の審議に入り左の事項が決定された。
① 福井県は石川県との関係も深いのでその時の状勢に応じて区分する。

(2) 当番県について
日本海方面としては一応福井県以西を原則とするが、福井県は石川県との関係も深いのでその時の状勢に応じて区分する。

(3) 会議の開催月と回数
回数は年一回とし、開催月は漁期にあたる毎年文春とし次年度は島根県に決定した。

(4) 水研担当官の出席について
水産省及び日本水研からは必ず出席する事にすつた。

沿岸資源・底魚漁業資源担当者会議

昭和三十年度表記担当者会議は十一月七日

区水研、学識経験者として東大松山、松江、大島、水大、田内、宇田、久保、吉原、九大、相川各教授等参考して開催された。

十一月七・八日 底魚資源調査について
九日 シンポジウム
(1) 当初の死亡要因について
(2) コミュニティについて
十一月 十日 沿岸資源調査について
十一月 十一日 昭和二十八年プログレスリポート(南海区編集)の検討

○底魚資源調査について
水産庁より「現在の底曳漁の単位努力当たり漁獲量は低下の傾向が強く、これが漁獲の影響か否を明にするような方向に研究をすすめ、同時に漁種相互間の問題が重要な点として浮上して来たことが着目された。日本水研トは明年三月までに完了させることに意見一致。この報告は極めて問題点が多く、明に推論の誤りではないかと指摘された点も二、三あり、更に再検討して上程することとなつた。なお明年的プログレスリポートは日本水研が漁獲に転換すべきである。

この報告は極めて問題点が多く、明に推論の誤りではないかと指摘された点も二、三あり、更に再検討して上程することとなつた。なお明年的プログレスリポートは日本水研が担当する。
(日・水研)

浅海増殖協議会

去る十一月十四日から十六日までの三日間目下各海区で編集中のプログレス・リポートは明年三月までに完了させることに意見一致。

出席者は北海道、青森、岩手、宮城、福島

と今年からこのプロックに変更した秋田、山

形の一貫六県の担当官、水研側は北海道、東

北、日本海の関係技官、それに学識経験者と

ロックの標記協議会が開催された。

出席者は北海道、青森、岩手、宮城、福島と今年からこのプロックに変更した秋田、山形の一貫六県の担当官、水研側は北海道、東北、日本海の関係技官、それに学識経験者として北大、東大、山形大の諸教授であつた。協議会は昭和二十九年度補助金に対するこの実施状況の説明並びに今後以降の実施

がこのように問題の焦点が次第にしほられて来つつあることは数年間の研究の成果と見ることが出来よう。

- 漁試験 ⑦ 渔池養鯉試験 ⑧ 稲田養鯉試験
 若布増殖試験 ⑨ 鮎増殖試験 ⑩ 岩海苔増殖試験
 ⑪ 牡蛎増殖試験 ⑫ 蛤増殖試験 ⑬ 蟹増殖試験

兵庫県に於ける第四回 漁村青年大会

去る十一月三十日兵庫県立水産会館で全県漁村青年大会が開催され、漁村青少年の研究発表が、技術研究と経営研究の二部に分れて盛大に行われた。
(兵庫県水試)

香住支所研究談話会

日水研香住支所においては十一月二十五日地元関係者多数出席のもとに第三十八回研究談話会が開催された。
なお、演題及び発表者は次の通り。

- 文献紹介『オールフォード・動物の生長の新しい因示方法』(渡辺 徹(資源科))
- エゾボラモドキ産卵に関する二、三の生態について(伊藤勝千代(資源科))
- 投石によるバフンウニ繁殖効果認定について(小川良徳(資源科))
- カレイの垂直分布と *Saccus maculatus* の形態(小川良徳(資源科))
- ズワイガニに関する基礎的研究(第2報 腹部形態の生長による変化)(伊藤勝千代(資源科))

日本海沿岸における主逐年活動の状況

(七) 島根県

- 漁試験 ⑦ 渔池養鯉試験 ⑧ 稲田養鯉試験
 若布増殖試験 ⑨ 鮎増殖試験 ⑩ 岩海苔増殖試験
 ⑪ 牡蛎増殖試験 ⑫ 蛤増殖試験 ⑬ 蟹増殖試験

主な活動事業内容

以降の年数

グループと漁業協同組合及び県との関係

活動名	活動主体	会場所在地	機関人質と
島根県水産研究協議会	松江市朝日町 島根県農業試験場 協同組合連合会内	松江市八束郡に居 する十五才以上 三十才未満の漁業者 者者一九八名	とする水産研究 団体とつて合意

一年

漁具漁法 水産増殖	三年
水産加工技術の改良	三年
普及 会員の研究発表会	三年
統計 販路の調査	三年

一年

以降の年数

現在のところでは漁協との関連は未だ比較的少いようであるが、経費その他の便益を得ている。県は昭和二十八年度よりこれらの團体が実施する事業に対し若干の補助を与えるとともに、水産技術改良普及員を各郡に駐在せしめ、その育成強化につとめていた。

浜田漁業青年団						
研究会						
岩美郡						
十二名						
漁具漁法改良に附する調査研究 漁業經營に附する資料の叢集 漁業に附する研究系表 会員の漁業に対する共同研究						
会員の漁業に対する共同研究						
一年						
(八) 鳥取県						
漁業改良普及事業による 指定研究 (國種、采養夫々之類)						

日本海沿岸に於ける主逐年活動の状況	十二名	十二名	十二名	十二名	十二名	十二名
浜田漁業青年団	浜田漁業青年団	浜田漁業青年団	浜田漁業青年団	浜田漁業青年団	浜田漁業青年団	浜田漁業青年団
研究会	研究会	研究会	研究会	研究会	研究会	研究会